

# Hello! FUJISEI

No.38

少子高齢化が進み、年老いた人が自ら年老いた家族の介護をしなければならないという「老老介護」問題が起きています。さらには、認知症の高齢者を介護する高齢者自身が認知症を患い、適切な介護ができなくなる「認認介護」も増加していると言われます。そのため、場合によっては、家族が共倒れするということや介護疲れによる心中といった痛ましい事件も発生しています。介護問題は、自らの将来に対する切実な問題となっています。

(財)生命保険文化センターが3年に1回実施している「平成22年度生活保障に関する調査」から、「介護」についての意識を見てみましょう。

自分が将来、要介護状態になることに不安を感じている人は89.8%で、前回調査と比較すると、「不安感あり」が1.5ポイント増加し、特に“非常に不安を感じる”は41.6%と6.1ポイントと大幅に増加しています。

そして、自分の介護に対する具体的な不安の内容をみると、「公的介護保険だけでは不十分」が67.5%と最も高く、以下「家族の肉体的・精神的負担」(65.5%)、「家族の経済的負担」(55.1%)、「介護サービスの費用がわからない」(51.8%)の

## 少子高齢化が招く老老介護、認認介護

# 公的サービスに不安 自宅介護を望むが…

順となっています。

自分のことだけでなく、将来親や親族などを介護する立場になった場合についても、82.5%の人が「不安感あり」となっています。

親などを介護する場合の具体的な不安の内容は、「自分の肉体的・精神的負担」が67.4%と最も高く、以下「公的介護保険だけでは不十分」(58.2%)、「自分の時間が拘束される」(53.6%)、「自分の経済的負

担」(51.8%)の順となっています。

そして、将来自分自身が要介護状態になった場合に、どのような場所で介護してもらいたいと考えているのかをみると、「自分の家」が37.7%と最も高く、次いで「公的な介護老人福祉施設など」(31.4%)、「介護などのサービス付き住宅」(10.5%)となっており、また、「在宅」は38.4%、「施設」は52.9%でした。

自分の介護に対する不安の内容 (%)

